

## 「ぬちど(命は)、宝」 翁長なおみ

1975年に「沖縄国際海洋博覧会」が開催され、幸運にも私はその準備に携わる貴重な経験をしました。

終戦後27年に渡りアメリカの占領地だった沖縄が、1972年に日本に復帰した記念に、世界中に呼びかけて海の祭典が開催され、主催地の沖縄も沖縄館を出展することになりました。沖縄は四方海に囲まれており、古くから『ニライカナイ信仰』、つまり「水平線のかなたに幸せをもたらしてくれる五穀豊穡の世界がある」と信じられてきました。このような背景から、沖縄館のテーマは、『海や、かりゆし』と自然に決まりました。「かりゆし(嘉利吉)」は沖縄の方言で、「幸せ」「豊饒な」などの意味があります。

沖縄館の出展に際し、官民挙げての行事として民間に委託することが決まり、「沖縄館設立総合プロデューサー事務所」が開設されました。中心となる専門委員は、県内外の建設、展示、歴史、民俗学、戦争史の専門家や大学教授等、24~5名で構成されました。その委員の意見をまとめて、形にしていくのがプロデューサー事務所の仕事です。事務所は、総合プロデューサー、事務局長、学芸員、議事録作成の事務員(私)の4名のチーム構成で、総合プロデューサーの中山良彦氏以外は女性でした。

私たちの最初の仕事は、大きな長い机に山積にされた沖縄に関する本を、おそらく2週間ぐらいだったと思いますが、短時間に読むことでした。次に本を片づけ、私たちの頭に積み込まれて印象に残ったものを取り出していく作業です。それを、川喜多二郎氏が考案されたKJ法を用いて、大小の紙に重要なものと枝葉のものとを分けて書き出していました。このような作業の結果、以下のようなテーマが書き出されました。

1. 信仰：うんじゃみという海の祭り(女性の祭司のみ)、シヌグという山の祭り(男性の祭司のみ)、イザイホーという久高島(神の島)で12年に1度午年の島の女性が神格を得る祭り
2. 薩摩の支配
3. 大貿易時代：琉球王国は、中国、日本、東南アジア諸国と交易を持ち、中継貿易地として栄えた。
4. 太平洋戦争：地上戦で20万人の人が亡くなり、多くの文化財も消失した。
5. 琉球政府：終戦後も沖縄はアメリカの占領下にあった。

これが沖縄館を作っていく上のたたき台となり、専門委員のメンバーと泊まり込みで肉付けしていく作業に入りました。沖縄館構想が八分どおりでき上がると、琉球王国が日本の幕府に送った貢物を借りることになり、当時の徳川黎明会会長であり尾張徳川家当主の徳川氏が会議に参加され、また映像・環境音楽の担当として、芥川也寸志氏も参加されました。

プロデューサー事務所のスタッフ4人は、ちょうど嵐の中に放り込まれたように、朝

から時には夜中の1時~2時まで、会議と資料収集と打ち合わせの毎日でした。議事録を担当した私は、専門的な会議についていけず、質問しようとしても白熱化した場ではそれもできず、呆然としてペンとノートを持っているだけのこともありました。また、ある時は話があまりにも面白くてのめりこんで聞いてしまい、後でプロデューサーに大目玉を頂戴したこともありました。他の2人の女性スタッフも同様に、トイレで泣いたり、落ち込んだり、愚痴を言いながらも、励ましあって何とか乗り切ることができました。

でき上がった沖縄館は、7月から翌年1月までの6か月間の会期中に、多くの来館者を迎え大盛況で、苦勞が報われた思いがしました。

また、沖縄館の広報担当だった私は、同じ叱責を数社の新聞記者から受けました。それは、南部に開館された『沖縄戦資料館(当時の名称)』の内容に関し、「旧日本軍を中心とした展示内容だが、沖縄戦はまさしく沖縄の地上戦で、米軍は日本本土への侵略の前線基地として、住民を巻き込んだ日本軍との戦いの場になった。沖縄は多くの住民が犠牲になり、その傷は今も癒されていないという現実を、館は訴えるべきだ」というものでした。「私に言われても困ります」と、県の力のある人を紹介して取材をしてもらいました。その後、どのような話し合いになったかは知らないまま、長かった博覧会は終わり、私の仕事も終了しました。

その疲れがとれたころ、博覧会の沖縄館総合プロデューサーだった中山氏から、「沖縄戦資料館の展示替えをするので手伝ってほしい」との話があり、2~3週間で終わるとのことだったので引き受けました。

新しい展示の構想は、展示物をできる限り少なくして、住民の生の証言をメインに出すとのことでした。中山氏と私は、県から借りてきた分厚い数冊の証言集をひたすらに読み込んで、中から展示にふさわしい証言を選び出していく作業を始めました。それは、まるで戦場の中に放り込まれ、泣き叫び、傷ついた人たちの前に立っているような感覚で、当時は悪夢にうなされ、暗闇が怖くて夜は外に出られないこともありました。

また、戦争史研究者と中山氏と3人で激戦地となった南部に行き、住民と日本軍が立てこもった洞穴を何か所か見ましたが、その当時でも何体かの人骨が残っていて、「これで戦争は完全に終わったといえるのだろうか」と、やり切れない怒りを覚えました。これらの一連の作業が終わると、この後は専門委員の人たちでまとめられることになり、私の仕事はこれで終わりました。

1978年10月に展示内容が一新された後、沖縄戦資料館を友人と訪ねました。

洞窟のような暗い展示室には、アクリル板の下に切り取られた短い証言の1つ1つにスポットライトが当たり、目と胸に飛び込んでくるような感じになっていました。展示物は、かけた茶碗、さびた鍋、ボロボロの衣服、軍服など点々と置かれていましたが、証言に圧倒されてあまり目につきませんでした。入口の辺りは外の光で少し明るいけれど、奥に行くにしたがって暗く、証言も救いようのない絶望と悲鳴に満ちた地

獄絵を見るような、凄惨を極めた言葉になっていきました。友人が外に出たいというので急いで歩き出すと、出口の近くに一段と大きく書かれ、強いスポットライトに輝いている証言があり、この前で立ち止まりました。「ぬちど、宝」とあり、これは、家族を失い自分も傷ついたオーバー(老婆)が誰かを励ましていた言葉で、唯一救われた証言でした。「どんなことがあっても生き抜きなさい。命さえあれば未来はひらけていく」ということでしょうか。

今回この経験を書くことになり、インターネットで「沖縄県戦争資料館」を検索すると、「沖縄県立平和記念資料館」と名称が変わり、外観も展示室もすっかり変わって見違えるようになっていました。あれから一度も行っていないのでわかりませんが、「戦争とはどういうものか、平和を築き守っていくには私たちはどうしたらいいのか」と、考えを深くする場所であってほしいと願うばかりです。

戦後、1950年に沖縄タイムス社の記者が「鉄の暴風」という、沖縄戦を住民の視点で記録した本を出版しました。このタイトルは、約3か月にわたり沖縄が米軍の激しい空襲や艦砲射撃を受けたさま、無差別に多量の砲弾が撃ち込まれるさまを、暴風に例えて付けられたものです。当時すべての出版物は、占領軍司令部に英訳して許可を得なければなりませんでしたが、この本を英訳したのは琉球大学英語教授の翁長俊郎氏で、その訳文のすばらしさは軍司令部でも高く評価されたと聞きます。タイトルを『Steel See』とし、「ある朝、沖を見ると、水平線にある幸せと五穀豊穰の世界である、ニライカナイは敵の艦船でびっしり埋め尽くされていた。」と、訳は始まりました。

アメリカ・イギリスの連合軍は、約1,500の艦船と延べ54万8,000人の兵力で、1945年3月26日の慶良間諸島を皮切りに、沖縄への一斉攻撃を始めました。これに対する日本軍は、現地招集の防衛隊と学徒隊2万人を加えて約10万人でした。連合軍は、4月1日に本島中南西海岸に上陸してから、6月23日に日本軍司令官自決後組織的な戦いが終わるまでのわずか3か月で、沖縄を掌握しました。沖縄戦の特徴は、住民の集団自決、日本軍による虐殺(住民がスパイになるという恐れ)が行われたことで、戦闘員よりも一般住民の戦死者が多いといわれ、実に県民の4人に1人が命を落とすと記録されています。

学徒隊には、女子のひめゆり学徒隊と男子の鉄血勤皇隊がありました。ひめゆり学徒隊は、1944年に日本軍が中心になって女子学生に看護訓練をするために結成され、沖縄師範学校と沖縄県立女子校の、教師18名と13歳から19歳の女子生徒222名で構成されていました。他に8つの学徒隊も存在しましたが、その半数以上が亡くなりました。

17歳でひめゆり隊に動員され奇跡的に生き延びた島袋淑子さんは、戦後33年教員をした後、1989年のひめゆり資料館会館のための資料収集に携わり、開館後も語り部として、その後副館長を経て館長となり、2018年90歳で館長を退任されました。退任後の今も戦争体験の語りべを続けられています。

島袋さんの班は、壕の中の病院で生徒 16 名で 600 人の重症病兵の食事介助、汚物処理、手足切断の手伝いから遺体埋葬まで行うという過酷な毎日でした。そして6月18日、日本軍から解散命令が出て、「今からは自らの判断で行動せよ」と突然に言われ、洞窟から出され敵前に放り出されました。逃げまどっているうちに大けがをして動けなくなった時、捕虜になり死を覚悟した島袋さんを、優しく治療して助けてくれたのは、鬼畜米兵と教えられていた米兵たちでした。「捕虜になると女子は強姦されて殺され、男子もむごい殺され方をする」と教えられていたので、多くの人たちが集団自決をしました。自決用の手りゅう弾を渡されていた人も多く、また高い崖から飛び降りた人も多くいました。これは沖縄戦で多くの犠牲者が出た原因の1つです。戦後、ひめゆりの塔慰霊碑の門前で参拝者のために、花や線香、飲み物を売る小さな店が数軒ありましたが、ある店主の話に次のものがあります。『時々泊まることもあったが、ある夜戸をたたく音がして出てみると、モンペをはいて鉢巻をした女学生風の女性が立っていて、「おばさん、友達が怪我をして死にそうなのですが、水を欲しがっているので下さいませんか?」と言い、その娘も傷だらけで杖にすがって立っていた。急いで水を持ってくるとその姿はなかった。』これに似た話を以前よく聞いた気がします。その女学生や他の迷える魂たちは、今は浄化され安らかに眠っているのでしょうか、それとも今の私たちの心には届かなくなったのでしょうか。島袋さんは、「国は戦争になったら国民を守ることはしない。二度と戦争をしない、できない国を皆で守っていかなければならない。武器で平和を作ることはできない」と語り部として来館者や講演会で伝えています。そして、「優しさと生きる強さを持って欲しい。命はたからです。」と、沖縄戦の生きた証言者として、健康が続く限り語り続けています。

今、私たちはコロナ禍の中で、病と死と先の見えない経済の行く末に、不安や恐怖を感じています。その反面、外出自粛で今までにない多くの自由時間を持ち、「自分と向き合う時間ができ、そこから新しい自分を見つけることができた」と、ポジティブにとらえる人もいます。今生きているこの命をどう使っていくか、この沖縄戦の話が少しでもお役に立てばうれしいです。